



鹽尻

四篇

一

1冊5  
508  
44



三河一里田也

和州諸將軍傳

○抑朝鮮ハ古ハ殷代湯テ周武王允テ箕子ヲ封セシ  
地也其後八百九十餘歳ヲ歴テ箕氏燕人術滿ガ為ニ  
被表漢武帝是ヲ平テ真蕃臨化玄兗樂浪四郡ヲ  
創メ置レタリ又三百八十余年ヲ過テ後漢ノ末ニ公孫氏  
晋高氏ト云ル二人並立テ彼國ノ王トナレリ其高氏  
力領セシ國ノ半ヲ高麗ト号ケタリ其後宋魏晋  
齊梁陳後周隋唐ノ数代六百余年ヲ經テ高麗王  
蜀人王建カ為ニ亡サル三氏カ世ニ到リ新羅百濟高  
麗ノ三韓ヲ合始テ一統ノ政ヲ執行フ我朝ノ人

皇五十九代宇多天皇寬平年中ニ當レリ其ヨリ以降彼土五代十國宋元等四百九十余年ヲ過テ近年大明洪武廿一年我朝ノ嘉慶二年ニ當テ彼國ノ執柄李且ト云者其主王瑋ヲ廢メ自高麗國王トナリ遂ニ大明ノ大祖皇帝ニ告シテ我朝明德三年（三應永）明ヲ洪武三十年也彼國号ヲ改テ朝鮮國ト名クト云

朝鮮國官位之大畧

○領議政正一品石玉帶 左議政正一品石玉帶

右議政正一品石玉帶

右三人ハ備邊司共朝廷ニ云ヘリ

○吏曹 天官第一唐ノ吏部日本武部ニ相當者官位ノ司ナリ下司ノ五官アリ行判書

○戸曹 地官第二唐ノ戸部日本民部ニ相當行判書司ノ

○五官アリ

右八國郡ノ宝物奉行也

○礼曹 春官第三唐ノ礼部日本治部ニ相當行判書

下司ノ五官アリ

右書簡ノ司也

○兵曹ノ夏官第四兵部ニ相當ス下司ノ五官アリ

右武家ノ司ナリ

○刑曹 秋官第五刑部ニ相當ス下司ノ五官アリ

右ハ公吏罪人等ノ司也

○工曹 冬官第六工部ニ當ル下司ノ五官アリ

右ハ修理細工奉行ノ司也

○弘文館 下司五官アリ儒者ノ司也

○司憲府 下司五官アリ目付ノ司也

○司諫院 下司五官アリ

○武家

○訓導大將 弓大將 御營大將 鉄炮

捕盜 罪人公 吏ノ司 都惣府 京外武士ノ司

○觀察使 兼巡察使 正三品 或二品 都吏 提讀

儒者

右ハ海道三組宛八組有之

○統制使 正二品 舟大將 府尹 慶州等ノ地頭

牧使 尚州等ノ地頭 東萊等ノ地頭

郡守 梁山等ノ地頭 熊州等ノ地頭

縣令 開城等ノ地頭 水軍 釜山等ノ地頭

水軍節度使 舟手ノ大將 各營 水營之次

虞侯 永營之次 兵馬節度使 陸大將

防御系使 陸大將 兵馬營將 同上

助防將 同上

○外地守令 柳好 横目

○万戸 權官 先達 軍官

部將 下横目 戸房 宝物司 礼戸庫直房ノ下

館直門直本学テリホ五十人 教ナ十人  
其外官位ノ品多シト云凡畧之

△鹽尻

天野氏隨筆

源有親住上州徳川郷應永年中鎌倉持氏每忌之  
謀害仍出郷而隱釋氏号長河陀佛令子親氏号  
徳阿弥陀佛經歴諸州以永亨元年到三河国松平  
郷云

一説曰普廣院義教永亨十一年二月討鎌倉持氏  
改關東制法將搜新田氏族之下源有親父子潛  
出徳川郷義季以来七世居人進作時眾居民始應永二年十月伊豆  
国拔落其後經鎌倉然為義教  
一説曰徳川下野守滿義屬新田義貞而勤王新田氏  
不得其志而亡矣自是徳川家通志族吉野右京亮  
有親滿義嫡孫修理進親季子也

奉遠州并伊谷官之令子ヲ与足利之兵戰處之於信  
州並合王家敗亡有親及令子三河守親氏被執而  
入京師時有遊行他阿上人在洛乞其命為時衆  
所謂長阿徳河是也長阿示寂之後徳河入三州坂井  
村今作酒井移居私平郷称松平太郎左衛門親氏武畧  
聞近境士庶奉為主ト云至今崇敬遊行上人  
者謝先祖往日之恩也云

三説似而不同末説蓋有故者欽夫親氏主興越  
也似明太祖其八世世所謂系譜以親氏系親信光為三伐  
然然親者親氏令身先代信光下合後  
讓家故有八世神君御天下光化被宇内嗚呼其  
九世之異神其武万歳之供基欽奉書禿筆亦實雖有其恐

而為遺忘私記此

○ 信玄身位熟騎馬好通計凡千三百四十騎ト云

是老臣より以下小者の多かり且醫師同明核系  
まてい内は操中り強あり是怪ありなる千三人計  
人好一万あり七百十二人討もありと云也二万も不  
及まてるもも人ともはるるをさすて多かり  
さる事と云道より今軍匠者流これと取らるも  
多き事の中又説あり海に波る孫子ことと此と  
王師の軍に強係の軍と合也云下又新し  
説とあり其量ち又異なり早別無所日舎小  
しそ孫の記多き少の他ありありと存







夢裏分明還三故鄉 双親召我問扶桑  
華鯨樓上一声鄉 撫枕猶疑在大唐

○尾府城 東照宮八元和五年九月十七日迁宮

南光坊天海 謚慈眼大師  
奉行 成賴集正藤原延成 竹腰山城守藤原正次

大工沢田若狭守藤原吉次

神衣 行事官詞進

甲冑弓箭等御奉納 御太刀三柄 宗也 正恒 国行

寬永四年号以佛院称天長山神宮寺尊壽院  
天海執之三

開基 慈眼大師 二代 玠祐權僧正 上兼院白山門 日藏院来住

三代 大僧都玠海 淨心院 玠舜僧正 觀心院

五代 靈胤僧正 六代 智洞大僧都 惠恩院

神主

正五位下 宮内大輔源幸勝

正四位下 民部大輔源恒幸

從五位上 刑部大輔源幸和

祭禮元和六年四月十七日始 十六日舞乐 十七日神幸

○江談抄中抄三三以備博如左  
加茂祭放免者紋羅錦綉服為檢非違使共人何

故乎戸部卷云非人之故不憚忘也公在郷云然者  
雖致放火殺害不可加禁過放他罪科者皆加刑  
罰於着羞服條者有指證文歟

信景按すく今世法は少礼少事の多き所  
凡人羞恥と云て徳とす實は恥れり  
江漢齊信郷の辨あれ其恥れり  
公任の論是と云ふ所の

玄賓律師弘仁五年律師辭退ノ哥

三悔川の流るる流るる  
衣の袖を更けられ

又古修都と稱せし時

印國の山水法し事多き  
悉く都はと満ぬまきり

○又自洛湯赴他国間道來會女人脱衣奉之得

三悔川の流るる流るる

按、猿葉く三悔をりてより好ゆり  
と云ふ半信はふゆり

白雲似帶回山腰 青苔如衣負殿背

在中詩と云ふ

松字本朝作字

山田福吉所作也云々

○藤堂高虎系圖

俗ハ宮部禪定坊下成り  
虎固より玄部海者中より藤下屬せり



秀雄慶長十五年八月八日逝す二十八歳しと号  
用松院天巖玄高

○小児疱瘡とすぬぐふ薬として或人のものも秘傳を傳ふ  
一レイテシガイノシモ

ワセネノソクイニテ●是ホドニ丸ニ金ハクヲ衣ニシテ  
小児年ノ数用フ

一符 嵐ハ字ト少紙ニ書丸シ銀箔ヲ衣メ一粒  
東ニ當レル井ノ水ヲ寅ノ刻ニ汲其水ニテ符ヲ吞セ水ニ  
水ヲ天目一盃半入レ黒大豆七粒金子一石ヲ右水ニ  
入レ一盃煎シ其湯ヲ以テ彼丸ヲ吞ス凡此藥ニ大藥  
一生疱瘡ヲニヌカレシ者多シト云

○少將光通越前の之はのく奇より少く秘傳のくま  
礼 勅判のちやけのひのころをさすゆかちゆく

早春の庭

このころのまきくまのれて東海を國の春に心動を  
山家の親

母人多く物さすそそいとも打世のふかぬ山郭へ  
月系をみる

新やしら月夜記のあつとゆかると月夜記を地を秘傳  
ゆか

かき山つりしたのそと古里をふれしうられゆかとの  
時をみる



語りて土御門院の皇子とす

實之真御寺文之無方又々寺

藏本の月半玉經久牛玉儀軌ハ世々希なる秘記  
付所々々として室生院と号す今寺在城南之秘記

任瑜法親王南朝紹運圖關せり

○ 曳行 書ヲ字ス時紙間ハ入ルケト云ハ曳ノ字也  
行ハ幾行ノ行ニ朱子文集ニアリ

○ 下棒一條痕一捆一掌血 米ノ俗語ニツカリトアリ  
付クテ云フ

○ 凡文字と作心との定其體と記念を其の甚意哉

教すもすも不成

詩 律ト 辞 其辭に因リ 歌 放情長 操 操守常ありて  
混窮す

曲 聲音雜比ハ云  
長短あり 吟 所嗟成嘔

嘆 沉吟深思大息と  
憂すも 怨 憤りて怒  
り 引 老後と序  
引

誦 和歌鐘ト徒然  
僧俗ト多クあり

詠 喘嘆して  
故水とあり

篇 情と字ト事と滿テ  
明と字ト編なり

ハハ年春事リ休言聲ニ字註解にククク

○ 父徳實録抜抄

上啟曰臣等具陳勸進之誠一卷

勸進の字今ハ修法師言哉と

余の志のしつめり

五月丁卯加<sup>テ</sup>筑後國高良王湊名神位田四町上

按神社の位階ハそ社の位階多クも

そ下も多

○ 撰家

三内口訣曰三光院内府所建此島抄政家云心以元來ハ

近九ノ二流ニテ以近衛ヨリ出タルヲ鷹司ト称シ九條

ヨリ別タルヲ二條一條ト申候是ヲ攝家ノ五流ト号シ

候抄家ノ字細アリテ五流ヲ為限諸家ノ量方立家ハ近衛ハ玄圖ノ面雖為宗領名記

無之九條ハ雖為唐流奉ノ関白月輪禪合後京極抄

政之御記号ヲ三代正記ト号シテ為天下之鏡ト然

間九條ハ正嫡ト見ヘテ哉雖然諸家之用ヒ五流

無差別ハ但二條之一流ハ南朝御出奔之後後光嚴院

被關聖運當代之御一流被用正統之事者二條

後善光因院抄政良基公一家勲功也依之至于今称天下御

師軌ト云

謹按スルニ皇朝ノ正統ヲ謂ハ後醍醐後村上長慶

院後龜山後小松也神聖御授受之始後光嚴

院田融ハ光嚴光明宗光三帝ト同一ノ御業不渡

氏家抑テ位即ケ奉レハ因統ト謂モ亦可也二條

良基武家ト議シテ東光院ノ流ト云々ハ

後光嚴院ト云フニハ武家ノ親トシテ

ト云々ハ故ニ二條ハ名臣ノ時武將軍家

諱ノ字ト換ラレテ御ト云

○二水記

永正元年七月七日ニ宮内省御出立事ト云々十日

宮々御出立事ト云々御出立事ト云々御出立事ト云々

以下候録 寛文九年十一月朔

○ 按千々々同書水心十四年七月の条下三十一日親  
王御子其不御所々御世自王有御所候云々  
又十百今日宮、御子御所々御世自王有御所候  
也と下りて七月五日御所前父母と云々  
はと云々みたまの御成し候事と云々  
御延令七清國御事との事と云々  
の御年寛文九年 行の御事  
十二百今日各御事

按すふ明日記 寛文二年九月廿一日の条々々々  
或も今更立長子其末稍身如灯掲物張紙奉

燈を御事と云々

さば事御事と云々

なりて云々の御成と云々

今を九月廿一日御延御事と云々

十月廿五日御儲子、御盛御姫

今御所御事と云々

あるが云々の文と云々

人のたふひ

○ 御所御事と云々

者と云々

しと云々の御事と云々



の御筆の文章を司りて筆を以て御筆と執ると云  
故に書林御筆の名ありしを今も承りて御筆と  
いふ所凡て是れ御筆の形を以てて御筆の御筆と  
意ありて上古の筆とありて

○阿蘭陀七州

セイラニト      グルウ子ケ      ウイタラキ  
ケルトラニト      ヲウブルイセハ      フリイイスラニト  
ヲラニタ

○寂明寺入道三歌

いふなりとひ定てかひんたのひしき我心なり  
右田持質の心を流し分と感し

いふなりとひ定てかひんたのひしき我心なり

○中流通義米舟の歌

を此も此舟なりと人いふも舟なりてきてぬ氷

○謙信太刀打の時信玄軍配圖を侍と云つ説也  
信玄も亦太刀打也南光坊天海及富山入庵眼前  
に是と見たりと云今申州流の軍法者流實録  
と不見謾に説と為のみ可恥の甚き事あり

○普光院義教赤松満祐元女が為事一旦問衆事曰  
我政可否所評于世如何一妻曰政淳而民安問赤松  
之女則曰苛政如踏白刃云大怒世人以我政為白刃

乃汝蹈之。以刀面令蹈之。女不肯屈。蹈之。死矣。滿祐恨之。謀逆。示疑之。使同明某遣播州伺之。同明某亦松園基。同明爭其基。籌輸贏。以基子擊滿祐之額。而為戲。同明歸洛。謂公曰。滿祐反者明矣。忍。是有大饗。故也。公夫備焉。嘉吉元年。滿祐朝矣。六月廿四日。公饗滿祐。視障將刺之。其族惣右衛門某以男寵被幸。知公之謀。私告滿祐。滿祐還圖殺及。後速自盡。今其族某殺之。惣右衛門告公之謀。後速自盡。廢記

按此說與家譜等說異。今據此說謂之義殺政之可否。問待女者。用簡以倭坊。將殺滿祐。滿

其謀於其族。三。是公之誤。而尤者在侍女謂政之非殺之餘。不足言嗚呼。

○ 蜀土の初音より好もあやふみれは遠逸集

勅題雷中早苗 源義鎮朝臣 大友

勅命のちとてし海りて

大友興慶の四くえたり

○ 近衛前殿下東都濱の沙館より 近衛前殿下東都濱の沙館より 近衛前殿下東都濱の沙館より



ナシクもとの事なり一多クもれいし  
晴なり月の光をまじえんとしあふむを焼く  
勢田より

この町に神代巻鳥さうあふむをまじえりて  
毛髪をうばひし

○大樹六十の樹々の時由枝となりし  
なりくくもれなり一多クもれいし

文将系保 和年より後

為くもれ指くゆめりてそれきてい新も代の末  
法宗寺二位家私のあふむをまじえりて

音保

○續々白くあふむの神の音の極も多し  
三二位有る瀬定卿

○古事談抜抄

花山院発心弘微殿女御恒徳公薨逝御悲歎之處町

屍殿得使宜書無常法文ヲ奉見被勸申御出家矣

師茲出家可御共之由被契申而令判御首給之後

申云ヲトニカワラヌスガタ今一度ニ上テ可歸參之由

申テ遂電其時我ヲカレナリケリトテ涕泣給云

嗚呼帝荒嬉ニ狂愚ナル者如斯藤道兼俊ヲ  
好也己レカ私ニル皇子ヲ立テ成ソ張トス故ニ胡書



守り職方なれ為降のせし断人後の体と為  
たり降せざるのそと所念只降をそと編入  
西原の嫡と自ら利と信し謀と先とす此の  
白川降の事なると為降事と奉りたるは自  
の所と知るなりてうらまざる所なりと信  
し又のありの事なり奉りたるは自  
あるそ中なるなりと信し又のありの事  
院たるは自の事なりと信し又のありの  
案至中臣某證申請天裁事し降なきも  
まじせたるなりは 左降事の許しあり  
ゆり降せざるなりと信し又のありの事

とて中なるなりと信し又のありの事

為降事なりと信し又のありの事 宗廟の事と信  
し又のありの事

平城天皇の御時をいひ國を強ひし降  
る儀事なりと信し又のありの事  
にしす降位百祭なりと信し又のありの  
許しありの事 國事をしす降位百祭  
なりと信し又のありの事  
し又のありの事 國事をしす降位百祭  
なりと信し又のありの事  
氏百祭なりと信し又のありの事  
年記年お揚言なりと信し又のありの事  
冠位ありと信し又のありの事





五席九  
大内人

守部氏 尾張庶流

右称神宮大喜氏一家亦神宮也但大喜氏者八劍宮奉祀之家

大喜氏八尾張宿称之庶流二家也今一家八断絶

檢授 中臈左座第一年老補之

別當 中臈左座第二年老補之

権内人 中臈右座第一年老補之

右称三老

衣冠十人 中臈左座各五人三老次年老補之

開闔一人

所司一人

中臈之内撰其人補之

音宿直

一番頭 俗云組頭

祝師代官 林氏

二番頭

惣檢授代官 栗田氏

三番頭

大内人代官 長田氏

右称三代官

御前役

栗田真人

神官列座之日薦敷等其他神役多之

祠官列座之時佞佞胎等ノ談敷多



厨家

栗田其人

右同上

兩師

大原氏  
長岡氏

司神饌器調進菓子ヲ役也

御供師

長岡氏二人  
林氏磯部氏各一人

調進神供ヲ役也

樂人

中禰家自右有其家

右中禰之因自右定其家

長役

俗云長太夫

祝部一年老

神厩司

俗云御馬居  
別當也

祝部座

千草太夫

神樂役

神子座中勒之

惣市

自祝部座出之

神樂市

有神子座出之

燒夫

二人

雁使

一人

猿樂

宮福

凡中禰上宮八十余家

林 栗田 大原 磯部 長岡

<sup>下ノ宮</sup>八劔宮祠官

神官

大喜氏

代官

番組頭

大喜代官

立殿  
松岡氏

大喜右京代官 鏡味氏

右称两代官

御前役

御供

御供

此外畧之

凡中膳下官五十余家

大原 松園 鏡味 若山

祝師座主師姓称菊田有數家其中称峯松者一家但同姓云神子座鏡味氏也

高倉宮祠官

松園

大原

知我麻宮

俗云源大夫

祠官

磯部 大原 鏡味

日破宮祠官

若山 大原

氷上宮祠官

久米氏

供僧

座主

如法院

權座主

因定坊

宝藏坊

持福院

承任三人

今一人

右天台宗属輪王寺宮

神宮寺

院家

醫王院

色衣

不勤院

愛染院

右真言宗

○府城 東照宮舞樂自 敬公在世之時大既定

四月十六日

平調

五常樂 音樂 拾翠樂 音樂 捍振 笛鼓計

大食調

大平樂 有舞

高麗 音取

拍捍 有舞 陵王 前亂序 留鼓斗 有舞

納蘇利 有舞 長慶子 音樂

每年如此然 誠公請 朝家樂官使傳秘曲於我  
伶人自此還城樂五常樂散午破陳樂打毬賀殿林  
訶等新舞之

十七日朝音樂

平調音取

五常樂 太平樂 長慶子

神行 音樂

慶雲樂

頰宮 音樂

千返樂 夜半樂 賀殿

還御 音樂









